



신
세계
리
평
리
金満里

人々會



『水は天からちりぬるを』1987年

生きることはじまり

目次

プロローグ ミルク玉つぶし。

第一章 母、そして幼いころ 21

朝鮮古典芸能の至宝Ⅱ母・金紅珠キムホンジュのこと 24

出生 30

ポリオ発病 38

阪大病院南二階2号室 40

束の間の帰宅 50

第二章 障碍児施設へ 57

別離 58

孤独な子どもたち 65

死んでいく友達 75

人間のエゴを見つめて 82

思春期の中で 88

軽度か重度か——施設の現実 93

何のための努力？ 100

第三章 暗いトンネル 107

高校へ行きたい 108

努力嫌いの白昼夢 112

学校探し 116

私には選挙権がない 121

「トイレまで行けたら学校入れたる」 126

第四章 運動 151

帰宅——通信高校へ 135

遠い級友たち 138

死を選んだ人 146

初めて、キム・マンリとして 152

「青い芝」という運動 159

集会か、学校か 167

はな、出ていくわ 174

包丁を振り上げた母 181

「生きていくのはおまえ自身だから」 188

第五章 生きることのはじまり 193

「いのちの初夜」 196

二十四時間の介護 198

今、産まれ出た幸福 205

障害者のバリケード 213

か
け
翳り 224

分裂 228

組織解体 235

第六章 自分を頼りに 243

野垂れ死にの精神 244

警察が、なぜ…… 249

私が私であることを求めて 253

「帰りたいなら今すぐ帰れ！」 258

沖繩——再生への旅 262

第七章 劇団「態変」旗揚げす 275

「国際障害者年」って何だ？ 276

「国際障害者年」なんてブツ飛ばせ！ 280

「態変」動きだす 288

旗揚げ公演『色は臭へど』 299

「やるからにはメジャーになろう」 307

K君——「ゲリラ・クヨクヨ」のこと 313

第八章 宇宙的な時間 319

子どもが産まれる！ 320

出産、そして育児 325

新しい世界——宇宙人の視点 334

劇団復帰 340

「態変」ケニアに行く 344

産まれること、生きること 350

寄稿
369

はじまりの風景 高橋源一郎 370

天地とのインプロビゼーション 金満里さんのこと 藤本由香里 384

降りそそぐ大地からの噴射を獲らまえて放つ

新装復刻版あとがきに変えて 金満里 401

プロローグ ミルク玉つぶし

ある芝居小屋の客席にて。

開演のベルを合図に客席の明かりが落ちて真っ暗となり、しばらくすると役者の出を待つかのように舞台が明るく照らし出される。しかし、いつこうに役者の出てくる気配がしない。と突然、傍らの客が何か叫びだす。すると、あっちこちから同じような声がしだし、何か大きなものを抱えて立ち上がる客たちが舞台へ向かい始める。はっとしてもういちど隣に目をやると、その人が障害者らしき人で、「うえに上げて、舞台に上げて」と絞り出すような声で呼びかけているのが、ようやく耳に入ってきた。

あつ、そうかこの人を上げなくっちゃいけないのだ、やつとそれに気づいて、慌てて声の主を抱えて舞台まで上げに行く。そのようにして舞台へ上げられた人たちが、舞台上のあっちこっちにごろごろ転がっている。と、転がりながら上の服を脱ぎだして、その下に着ている鮮やかな色のレオタード姿になるのが見えます。ちょうど蝶の変態のように。

——私のやっている劇団「たいへん態変」の一九八七年の公演『水は天からちりぬるを』はこんなプロローグからはじまった。

劇団には、人を驚かせてナンボ、というのはつきものだとは思いますが、役者が客席にいて、しかも客に抱えられながら舞台上上がるところはそうめったにあるまい。そう、もうお気づきのこととは思いますが、私

ちの劇団「態変」では舞台上上がるのは全員が身体障碍者。これは世界でも珍しいと思う。私は劇団を興した主宰者、いわゆる座長であり、すべての作品の台本を創り、演出も一手に引き受けている。そして私自身も、首から下は全身麻痺の、「小児マヒ」いわゆるポリオによる重度障碍者である。名前をキムマンリ金満里（本名—金満里子）といい、在日朝鮮人二世だ。

ここで私の身体的状態をもう少し詳しく説明しておく、自力で坐っていられるが、微妙なバランスの上に成り立っている、ちょっとしたでも外から力を加えられたり押されたりすると、簡単に倒れてしまう。自力で自分の体重を支えられないので、は這って移動することは何とかできて、車イスに乗るとか、高さの違うところへ体を移すことはできない。

足はぜんぜん動かないので、当然立つことはできない。腕は、少し

は上下左右に動かすことができるが、ほとんど力はない。だが抱えられるときに相手の首に纏まることは、かろうじてできる。手は、自分でご飯を食べるとか、簡単な服を着るとかはなんとかやれる。トイレは、便器を持ってきてもらって自分で用足しをしてパンツを上げる、というところまではできるが、ズボンを上げるとか、ズボンの留め金を留めたり、ファスナーを上げたり下ろしたりはできない。

寝返りは、最近軽い羽毛布団に代えたので、なんとかできるようなになった。首も、横に寝てなら頭を持ち上げられるが、仰向けに寝た姿勢から自力で頭を持ち上げることはできない。そして脊椎が彎曲しているので、身体がかなり変形している。ポリオにしてはかなり珍しい全身麻痺の重度障害者である。

ポリオは肢体不自由がほとんどなので、言語障害をとまなうことはめったにない。私も言語障害はなく、首からは健康者と同じに見える

るので、車イスに乗っているとそんなに重度には見えない。車イスの印象が先にくるので、乗っている人が重度かどうかまでは、すぐにはわからないようだ。だがとにかく、外出するには車イスでないと、それも押してくれる人がいないと、外には出られない。要するに日常生活のほとんどの部分で人の手を必要とするのだ。

しかし、芝居を始める前から私は一人暮らしをしており、劇団の旗揚げ当時で、もう九年ぐらいにはなっていた。と言えば、日常のほとんどの部分で人手がいる状態なのにいったいどうやって、と疑問に思う人もいるだろう。たしかに実際には二人暮らしのようなもので、ただその相手が一日二交代で替わる。身の回りの手伝いをするために「介護者」が来てくれるのだ。だが、そこで生活している主体はあくまで私である。私たち障害者の間では、こういう暮らしを、障害者の「地域での自立生活」と呼んでいる。

そして、冒頭に紹介した、劇団にとっては四作目にあたる芝居『水は天からちりぬるを』は、私にとって大きな転機となった作品であった。それは私が三十二歳で初めての子どもを産んで一年後に、芝居に復帰して創ったものだったからである。

一人で暮らすことも演劇をすることも、それまでの私にとってまったく想像もしないことだったが、子どもを持つ、というのはその中でも最大級のものだった。私は人の手を通して自分の面倒をみているわけで、自分のことだけで精一杯であり、自分がいかに生きるかがまず第一だった。そしてそれまで、一人で生きていたほうが世間に借りをつくらなくてすむ、自分一人の身を張って生きることは、怖いもの知らずでキッパリしていて清々しくていい、と思っていた。

その逆に、子どもをつくることには、世間に人質をとられているよ

うな、借りをつくってしまったような、後ろめたさがついてまわる。子どもを持つことで、人は保守的になる。自分の子さえ良ければいい、というエゴイスティックな感情も湧き起こる。私は、人にそんな感情を起こさせる子育てというものは、社会悪だとさえ思っていたのだ。そんな私が子どもを産んでしまった。しかもいつのまにか、そこから生まれてきた感情を、このとき、舞台の上で表現してしまっていたのである。

そのころ、産休で芝居を休んでいるときの公演パンフレットに、「世に産み落としてしまった責任云々」とか「芝居をすることが初めて怖いと思った」などと、芝居と子どものことを重ねあわせて書いている。一人で暮らし始めたときも、障害者だけで劇団をつくったときも、私はそれまで怖いものなしで生きてきたが、子どもを持ったことで初めて、世間が怖いと思った。だが、むしろそれはいいことだと思

えた。恐れを知って初めて見えてくること、また、弱みを持つことで初めて持てる責任というものがあるような気がしたのである。

このとき、舞台も子どもも、けっきょくは私が産み出してしまったものなんだ、ということに初めて気がついたように思う。私が私として生きるために必要で、そのために紡ぎ出してしまったもの。そのこと自体には、良いとか悪いとかの注釈をつけようのないこと。それまで、常に目的に照らしあわせて意識的に生き方を選んでいく、というのに近い生活をしていた私は、そんなことが実際に自分の身にもふりかかるんだ、ということを知ったような気がする。

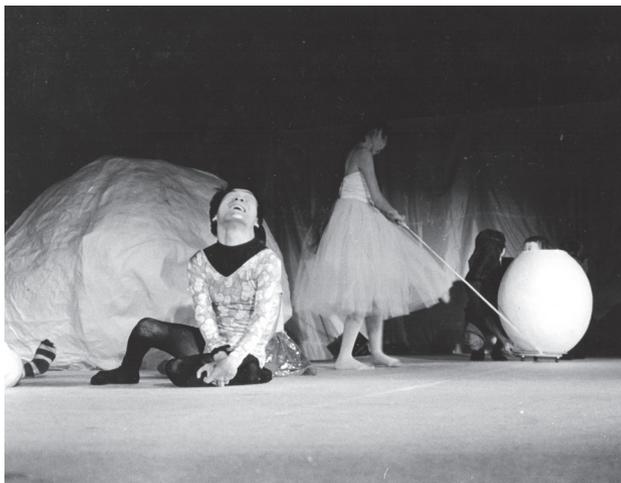
またこれは、劇団にとっても大きな転機となった。それまでの「態度」の芝居は、障碍者が舞台の上から健常者（障碍を持っていない人）に「毒づき」、見る人を挑発していく、という傾向が強かったのだが、私がこの体験を経たことで、表現はもっと掘り下げられ、もっと内面

的なものに変わっていく。『水は天からちりぬるを』は、そのきっかけになった作品だったのである。

さて、その内容はというと、表題通り、重要なテーマは水である。冒頭のシーンの、服を脱ぎ捨てて、鮮やかな色の身体の線をきわだたせるレオタード姿になるといっのは一つのもの、を剥ぎ取って本来の自分になることを表わしている。

そうやって楽しんでいっているうちに芝居では、舞台上で役者がそれぞれ化粧をします。これは、本来の自分に帰って楽しんだり遊んだりしているうちに、また色々なものを付着させてしまう、ということを表わしている。

そして今度は、透明の丸いボールに水をなみなみと満たし、それで顔の化粧を洗い落とす。最後には、舞台中央に置いてあった白い大きな丸いものから舞台全体に水が噴き出し、役者たちは水を得た魚のよ



『水は天からちりぬるを』の舞台。卵の中に入っているのは一歳の息子。

うにその水で潤い、喜びに興じながら、終いには潤いの源である白い物体までもを壊しだし、嬉しそうに去る。

これが、この作品の重要な流れだった。

この芝居には「人間のエネルギーはつまるどころ創造と破壊の繰り返し」という私の信条が色濃く出ているが、こうしてみても、やはりこれは、子どもを産んでしまったという実感がつくらせた芝居だとつくづく思う。

中央の丸い白いものはたぶん子どもに与え続けるおっぱいであり、潤う水は、吸われ続ける乳だろう。現にこのときの舞台では、おっぱいがパンパンに張り、舞台上でレオタードに乳がにじんでいたほどだった。そのころは産んだ子どもにおっぱいを吸われ続けていた真っ最中だったのだ。

だがそれも、舞台の上で潰されるミルク玉のように、いつかは終わる。

創造と破壊——それは、「親を越え、また自分も越えられる」という、永遠に繰り返される親殺しにも通じる、人間の成長への祈りなのかもしれない。

*1 「金満里子」は戸籍に登録された名前で、朝鮮語では「キム・マンリジャ」と発音されるべきだが、家族は「まりこ」と呼んでいた。また外向けには「原田満里子」という通名（朝鮮を植民地支配していた日本が「創氏改名」により朝鮮人に日本式の名前を名乗らせていた続きで、解放後も外国人登録票に通名を併記してきた）も用いていた。「金満里」は通称名ということになる。金が通名を捨てて朝鮮人アイデンティティで生きていくことにしたときに選んだが、「マンリジャ」なり「まりこ」では収まりが悪くてこの呼び方に落ち着いた。

私の生い立ちには、徹頭徹尾、普通ということが何一つない。かなり変わった存在である。

誕生したのは一九五三年十一月二日。大阪府の池田市というところで生まれた。よけいなことだが干支は巳、血液型はO型、星座は蠍座である。私の母親は在日の一世。いわゆる朝鮮半島から日本に渡ってきた朝鮮人である。だから日本語はたどたどしく、苦手だ。また、この人は朝鮮の古典芸能の伝承者で、芸人として生きてきた。この母の生きざまによって私の存在がかなり規定された面は大きい。

在日朝鮮人という立場も、日本の中では少数派だと思うが、在日の中でも古典芸能家というのはいくらも数少なく、一般的な在日の家庭ともまた違った特殊な家庭といえるだろう。

私は十人兄弟の末っ子で、母親は四十二歳のときに、他の兄弟とは父親の違う子どもとして私を産んだ。そして三歳のときにポリオに罹り、それ以来、小児マヒの後遺症として全身麻痺障害者となり私の人生ははじまる。

在日の朝鮮古典芸能家という少数中の少数の珍しい家庭に生まれ、またそのうえに重度の障害者になった。同じ立場の人を他に探そうとしてもそうはいない。この徹頭徹尾「普通」ということがない私の生い立ちには、結果として私には幸いしたと思う。